

土木と土木工学

井口 昌平

「土木」という語は、当の土木技術者の間でさえも、「好ましくない」などと思われることがあり、ふびんな思いがする。好ましくない、というのには恐らく二つのわけがある。ひとつは土木工事そのものの性格にかかわるもので、そこには、局外者から見れば「荒っぽさ」とか「土まみれのよごれ」とかが強く認められるのであろうし、それは事実として受け止めるべきであらう。

「土木工学」という語は、これまでのところ、大学社会だけの中で生きている、と言っても大して違っていないと思う。この語は英語の「Civil Engineering」に対応するものとして理解されている。そのことから「土木」なるいまわしい語をさけて、それを「文明工学」と言いかえよう、という提案が出されたこともある。その提案者は「土木」という語も「文明」と言いかえようなどと勇み足を踏み出したわけではない。

「荒っぽさ」から「文明」と、どんでん返しのようなへんげを試みるのは無理とわかって、「建設」という語が浮かび上がった。しかし、そのときには、「建設」＝「土木」＋「建築」という公式が成り立つという諒解があった。それと同じころに、あるいはそれよりもほんの少し早く「土建」という語ができた。それは、たぶん第二次世界戦争のころであり、同じころに「機器」とか「機甲部隊」とか「空母」とか「衣料」という語ができた、と覚えている。それらは、当時絶大な権力を持っていた軍人の間から生まれたものと私は推定している。ところで「土建」という語について「土建屋」（ドケンヤ）という語も生まれて、そういう職業の人びとのすさんだ姿から、「土建」という語がますますいやしめられていった。さいわいなことに、というか、自然にというか、早くも「土建」という語は死語になっているようだ。

同じころに、同じような意味を持たせて「施設」という語を浮かび上がらせる一派があった。それは海軍ではなかったかと思う。海軍では当時「施設」という名をかぶせた部局が設けられた。この語は現在自衛隊の中に受けつがれているのではないか、と思う。

「土木」という語が好ましくないと感じられるもうひとつのわけは、この語の音であらう。「ドボク」と書けばはっきりするように、3音節のこの語のうちの2音節が濁音であり、それが耳ざわりだったのであろう。しかし、最近では日本人の好みが急速に変わりつつあって、濁音はむしろ「かっこいい」と受けているのではないだろうか。

それにしても、「土木」という語はだれが作り出したのだらう。それは別として、抽象概念を言語に表現しようとする場合に、解析的な方法がとられることもあり、また比喩的な方法がとられることもある。「土木」という命名は後者にあたる。フランス語でも、直訳すれば、「橋と道」という言い方——Ponts et Chaussées（ポンゼショセ）——を「土木」に対して用いることがある。また、オランダ語では waterstaat という語が土木局とか土木部というような意味をもっているが、このオランダ語の中の water というのはまさに水のことであろう。日本では「土と木」、フランスでは「橋と道」、オランダでは「水」と、それぞれお国ぶりを発揮しているところが面白い。

比喩的な命名法というのと、しかつめらしいが、それは実は「あだ名」をつけることにほかならない。その点に思いをかえてみると、このごろは、少なくとも日本を含む工業国では、新しい概念に名前をつけようとするとき、あだ名をあてがおうとする試みが貧しくなって解析的な方法がとられ、さらにその結果を省略するという方法で間にあわせるようになってきているようだ。例として、「レーダー」を取り上げる。これは英語の radar の直輸入だが、その英語は、radio detecting and ranging を略しただけのものだ。

（筆者・正会員 工博 東京大学教授 生産技術研究所）

